

文法学習に関する 信念・態度・ストラテジーと学習成果

向山 陽子

1. はじめに

第二言語教育において、同じ指導をしていても学習者の能力に必ず差が出てしまうことは、教師であればだれもが経験していることであろう。どのような指導が第二言語習得を促進するのかを解明する研究が行われているが、学習者の習得の達成度や速度の違いは指導のタイプによらないものであり、どのような指導であっても必ず起こることである。従って、効果的な指導方法の追究だけでは習得の個人差は解決できない問題であり、どのような要因が第二言語習得に影響を与えるのかを明らかにする必要がある。

2. 先行研究

2.1 指導の明示性

指導の効果に関する研究領域では、どのような指導が効果的であるかが中心課題となっているが、その中ではどの程度文法を明示的に教えるか、という指導の明示性が主要な議論の一つである(Norris & Ortega 2000)。文法指導はメタ言語によって文法を説明する明示的な指導から、意味重視の活動の中で、必要に応じて言語形式に焦点を当てるだけの、暗示的なものまで様々である。これらの指導のうち、意味と言語形式両方に焦点を当てる指導には、効果があることが実証されている。しかし、実験研究においては、指導の効果をグループ全体で見ると、個人を見た場合には効果のない学習者もあり、個人差を含めて研究する必要があることが指摘されている。

2.2 習得に影響を与える要因

第二言語学習は様々な要因に影響を受けているが、社会的要因（文化や学習環境など）と個人的要因に大きく分けられる(Oxford 2003)。個人要因の一つに「信念・態度」があるが、心理学の分野では、信念と、ストラテジーの選択や学習成果との関係が研究されている。しかし、第二言語習得研究の分野では、

信念と学習成果やストラテジーとの関係は、あまり研究されていない。そこで、本研究では「指導の明示性」「信念・態度」に着目して、文法指導効果の研究の枠組みの中で、文法学習に対する信念・態度・ストラテジーと、学習成果との関連を探ることを目的とする。研究課題は以下の5つである。

1a：文法学習に関する信念と学習成果は関係があるか。

1b：指導方法に対する態度と学習成果は関係があるか。

2：文法学習ストラテジーと学習成果は関係があるか。

3a：文法学習に関する信念と文法学習ストラテジーは関係があるか。

3b：指導方法に対する態度と学習ストラテジーは関係があるか。

3. 研究方法

3.1 調査機関・調査対象者

調査は初級の間、会話の中から文法を暗示的、帰納的に学習させる指導を行っている教育機関に依頼した。この教育機関では初級の間は教科書から離れた授業が行われている。板書もせず、メタ言語による文法説明も一切行われない。学習者が間違えたときは繰り返し要求、明確化要求、リキャストなど暗示的なフィードバックで対処し、明示的な訂正も行われない。調査対象者は、そこに在籍する中国人学習者 169 人で、分析に当たっては欠損値のあるデータを除いた 161 人を対象とした。

3.2 質問紙

質問紙は「文法学習に関する信念」「文法指導に対する態度」「学習ストラテジー」の3部構成で、すべて5件法による回答である。

3.3 学習成果

学習成果は、初級コース終了後に当該教育機関で行われた文法テスト、聴解テスト(日本語能力試験3級の問題)、読解テスト(多肢選択問題)の結果を用いた。

4. 結果と考察

質問紙データを因子分析した結果は表 1～3、また、それらの因子得点と学習成果との相関は表 4 の通りである。

4.1 信念と学習成果の関係

学習成果と相関があったのは 4 つの因子のうち「演繹的学習支持の意識」だけで、文法と聴解の成績に、負の相関があった。このことから、成績が低い学習者ほど「演繹的学習支持の意識」が高く、メタ言語知識が運用を支えていると考えていることが示された。

調査した教育機関の指導方法では聴覚情報からルールを帰納的に学習しなければならない。従って、そのような学習が苦手な学習者が、演繹的学習を支持するようになったという解釈も可能であるが、同時に、コースの初めから演繹的学習支持の信念を持っていたために、帰納的指導の効果が現れなかったとも考えられる。本研究の調査方法では、因果関係は明らかにならないが、少なくとも指導方法と学習者の信念のミスマッチは、よい結果をもたらさないとと言えるだろう。

表 1 「文法学習に関する信念」の因子分析結果

項目	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4
文法知識不要の意識				
6. 文法を知っていることは、日本語が上手になることと関係がない。	.845	.136	.044	.138
7. 日本語が上手になるためには、文法の知識が必要だ。	-.808	.230	.069	.212
15. 新しい文型を勉強するとき、文法を説明しなくてもいい。	.652	.133	-.219	.020
帰納的学習の支持				
14. 文法説明がなくてもたくさんの例文の中からわかるようになる。	.016	.754	-.117	.063
9. 自分で文法を説明できなくても、日本語を使うことはできる。	.239	.636	-.021	-.145
12. 文法は日本語を聞いたり読んだりするうちに、自然とわかるようになる。	-.039	.615	.209	.148
11. 文法を知っていても、日本語を使えないことがある。	-.176	.491	.191	-.336
文法重要性の認識				
1. 文法は、ことばの勉強の中で一番大切だ。	-.074	.091	.841	.117
2. 文法は、ことばの勉強の中で、発音や語彙などと同じぐらいの大切さだ。	-.120	.032	.824	.162
演繹的学習の支持				
8. 文法さえわかれば、日本語を使うことができる。	-.039	-.048	.132	.724
10. 自分で文法が説明できない文型は、使うことができない。	-.014	.137	-.085	.706
16. 新しい文型を勉強するときは、練習の前に文法だけ先に説明した方がいい。	.012	-.091	.165	.482
寄与率(%)	15.86	14.33	13.16	12.65

表 2 「指導法に対する態度」の因子分析結果

項目	因子 1	因子 2	因子 3
否定的態度			
6. この学校の教え方では、使い方が分からない文型が多かった。	.747	.096	.110
7. 授業中、何を勉強しているのか分からなかった。	.713	-.056	-.116
3. 初級の授業の方法は自分には難しかった。	.623	-.187	-.264
8. 会話の中からルールを見つけるのは難しかった。	.578	.097	.317
受容的態度			
4. この学校の教え方は自分に適している。または、好きだ。	-.178	.723	.269
2. この学校の勉強の仕方にすぐに慣れた。	-.350	.691	.138
9. 教科書を中心に勉強した方がいい。	.205	.591	-.390
5. 授業で勉強している文型は、授業を受けるだけで使い方がわかった。	.200	.529	-.056
問題意識			
10. 耳からだけでなく、ホワイトボードに例文を書いたり、教科書を見たりして、目からも勉強できるようにした方がいい。	.230	.015	.702
1. この学校の授業は、今までに経験した外国語の教え方と違っていた。	-.168	.040	.673
寄与率(%)	21.04	16.87	13.88

表3 「文法学習ストラテジー」の因子分析結果

項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
教科書志向					
2.「楽しく学ぶ日本語」(茶色の教科書・例文だけ)を家で見た。	.872	.048	.057	-.038	.076
1.「ファンダメンタル・ジャパニーズ」(最初に使う緑色の教科書・英語の説明あり)を家で見た。	.863	.098	.050	-.066	.107
3.教科書の予習をした。	.714	.251	.296	.030	-.053
4.その日に勉強したことを家で復習した。	.604	.511	.320	.022	-.140
文法知識志向					
5.家で文法の参考書を見た。	.146	.828	.140	.087	.121
8.文法のドリルを買って勉強した。	.173	.809	.182	-.013	.183
定着志向					
6.授業中に勉強した例文をすらすら言えるようになるまで覚えた。	.190	.369	.768	.025	-.122
7.授業で勉強した例文を書いて覚えた。	.104	.222	.726	-.084	.204
10.勉強した文型を積極的に使うようにした。	.186	-.139	.592	.445	.130
コミュニケーション志向					
12.日本人と積極的に話した。	-.043	-.078	.096	.834	.082
11.テレビをよく見たり、ラジオやテープを聴いたりした。	.023	.197	-.067	.795	-.130
翻訳志向					
9.勉強した文型を自分の母語に翻訳した。	.068	.217	.112	-.012	.916
寄与率(%)	20.99	16.44	14.52	12.85	8.52

表4 信念・態度・学習ストラテジーと学習成果の関係

		学習成果			信念				態度		
		文法	聴解	読解	知識 不要	帰納的	文法 重要	演繹的	否定的	受容的	問題 意識
信念	知識不要	-.095	-.066	-.074							
	帰納的	.075	.007	.088							
	文法重要	.012	-.034	-.068							
	演繹的	-.173*	-.251**	-.103							
態度	否定的	-.316**	-.279**	-.361**							
	受容的	-.087	-.106	-.152							
	問題意識	.182*	.074	.156*							
ストラ テジ ー	教科書	.036	-.053	-.003	-.118	.024	-.108	.011	-.119	.198*	-.083
	文法知識	-.085	-.096	.032	.022	.016	-.001	.113	.187*	.035	.015
	定着	.057	.148	.020	-.162*	.125	.072	-.037	-.169*	.198*	.108
	コミュニケーション	.110	.154	.141	-.122	.131	.044	-.056	-.095	-.120	.142
	翻訳	-.163*	-.216**	-.128	-.085	.007	-.003	.112	.252**	.063	.114

** p<.01 * p<.05

4.2 態度と学習成果の関係

否定的態度はどのテストとも負の相関があった。つまり、成績が悪い学生ほど、指導方法に対して否定的であることが示された。否定的態度であることは、内発的動機付けが下がった状態と考えられる。教室内の動機付けが重要という、最近の動機付け研究の観点から考えると、成績下位者ほど指導方法

に対する態度が否定的であることが実証されたのは興味深い結果である。しかし、成績が悪い学習者が、学習成果が上がらないことを指導方法に起因すると考えているのか、もしくは初めから指導方法に対して否定的だったから、学習成果が上がらなかったのかは、相関関係からは明らかではない。しかし、否定的態度だから成果が上がらない、成果が上がらな

いからさらに否定的になる、という双方向の作用があったと推測される。

一方、受容的態度と学習成果と読解に、弱い負の相関が見られただけで、それ以外は相関がなかった。このことから、受容的態度を示しているからと言って、必ずしも成績がいいわけではないことが分かる。つまり、指導方法に対する受容的態度はそれほど学習成果に影響はなく、むしろ否定的態度を持つことと、学習の失敗の方に強い関係があると考えられる。

また、指導方法に対する問題意識と、文法テストに正の相関があったことから、成績のいい学習者は指導方法に敏感だと言える。指導方法に対する問題意識はメタ認知と考えることができる。能力の高い学習者はメタ認知ストラテジーの使用が多いという、知見があるので、この点で「問題意識」と学習成果に関連が見られたのであろう。

4.3 学習ストラテジーと学習成果の関係

学習ストラテジーと学習成果との関係は、翻訳志向のストラテジーに文法、聴解との間に負の相関があった。このことから形式と意味・機能を母語を経由せずに結びつける方が習得を促進すると考えられる。習得とは言語形式と意味機能とのマッピングである。意味のやり取りがあるコミュニケーション活動の中で言語形式の使い方を練習することが重要であると示唆される。

教室外での学習ストラテジーとテスト成績には関係がなかったという結果に関連して、使用ストラテジーの数や頻度と成績に関係がある可能性を考慮して、ストラテジーの合計得点を計算して成績との相関係数を求めたところ、文法、聴解、読解すべて無相関であった。つまり、多くのストラテジーを使っていることと成績とは結びついてはいなかった。従って、教室外でどのような学習ストラテジーを用いても教室での学習成果の差は埋められないことを意味すると考えられ、教室での指導の重要性が示唆される。

4.4 信念・態度と学習ストラテジーの関係

信念とストラテジーとの間には、ほとんど相関が見られず、文法知識不要の意識と定着志向のストラテジーに弱い相関があっただけである。それに対し、

文法指導に対する態度に関しては、否定的態度と文法志向、翻訳志向のストラテジーとの間に正の相関、定着志向との間に負の相関が示され、否定的態度の学習者ほど、教室外で文法学習や母語訳をしていることが示された。これは、暗示的帰納的指導に満足できない学習者が、文法の参考書でメタ言語による説明を確認し足り、母語に訳して理解していたことの現れと解釈できる。また、肯定的態度と教科書志向、定着志向の学習ストラテジーの間に、正の相関が見られた。この結果から指導方法に肯定的態度を示している学習者は、授業で扱われた項目を確認したり、例文を記憶したりするような学習方法を用いていることが明らかになった。

5. まとめと今後の課題

本研究の結果から、文法学習に限定したものではあるが、以下のように信念・態度、学習ストラテジー、学習成果に関係があることが示された。

- ①指導の方法と学習者の信念が一致しない場合、学習成果が上がりにくい。
- ②指導方法に対する受容的態度より、むしろ否定的態度の方が、学習成果と関連が強い。
- ③翻訳ストラテジーの使用は文法、聴解の成績に負の影響を与える。
- ④信念・態度が、学習ストラテジーの選択に影響を及ぼす。

今後の課題としては、コース開始前と、終了後に調査を行うことが考えられる。そうすることにより、信念、態度、ストラテジーの変化、また、学習成果との相互関係を探ることが可能になると考える。

参考文献

- Norris, J. M. & L. Ortega (2000) Effectiveness of L2 instruction: A research synthesis and quantitative meta-analysis. *Language Learning*, 50, 417-528.
- Oxford, R. (2003) Current issues in language learning research and practice: What influences students' achievement? Paper prepared for the Society for Japanese as a Foreign Language.